

状)を与えた。その御朱印状には

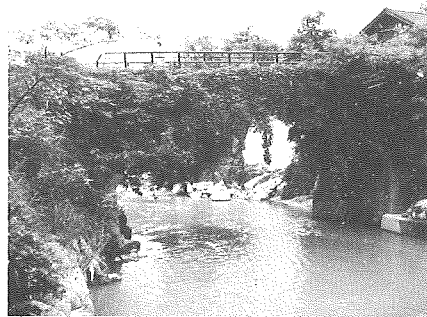
土器手際無比類 於九州名護屋可為用者也

二十六日

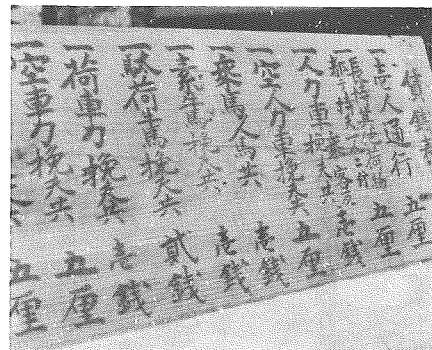
御朱印

土器師 家長彦三郎

とあり、この陶師は高木瀬町瓦屋敷の家長彦三郎といった。秀吉一行が通過したとき、見物した者が、「太閤は小男で眼大きく朱をさしたようで、顔の色、手足まで赤く、華やかな衣裳を着て足半をはき、金の熨斗付きの大小の朱鞘を指し、刀の鞘にも足半一足結び付け、馬上の御旅行でお供にも駕籠に乗った者は一人もいなかった。」と話している。(葉隠聞書より要約)



三反田の眼鏡橋



渡瀬橋の賃銭表 (川上小蔵)

### 3 眼鏡橋 (三反田)

寛永十一年(一六三四)支那の僧如定が長崎在住の折り、支那式拱橋の架橋を伝えたといわれている。三反田の眼鏡橋はその工法によって出来たもので、明治二十七年(一八九四)松梅村長 野田俊吾の時代に竣工した。当時の工法としては画期的なものといえよう。この橋を渡って

行くのが昔の旧道である。又、八反原の国道三三三号線にも眼鏡橋がある。

### 4 渡瀬橋 (平田橋)

この橋は川上地区から佐賀市へ行く近道であるが、昭和初期まで渡し賃を取っていた。(昭和八年ごろ三銭)、ここに掲げた渡し賃標板は江戸末期から明治に至るころのものと思われる。(川上小学校所蔵)

## 九 地名の由来

地名の由来を調べてみると、その置かれている地理的關係、地形的關係、歴史的關係等何らかの關係があるようで興味深いものがある。例えば福田、檀田、平田、東西山田、上下戸田、下田等は水田に關係があり、三反田、八反原は地積の広狭を表わした地名ではないだろうか。北原、萩原、井手原、江熊野、西野、野口、平野、等「原」「野」の付いた地名はいずれも昔は原野であった所に集落が出来たに違いない。又歴史的地名は尼寺、国分、城崎、鍵尼等に見られる。以下調査不十分であるがその幾つかについて述べてみよう。

### 1 久池井

昔は「朽井」と書いた。正嘉元年(一二五七)上佐嘉一帯の領主高木氏に代って、国分次郎忠俊が朽井の地頭職になってから、その子国分季高(法名順光)もまた国分寺、朽井村の地頭職になっている。

旧春日村は彼らの支配下であった。江戸初期の正保二年（一六四五）に作られた郷村帳には久池井村の地名で書かれている。久池井は奈良時代以降、肥前国を治める国府の正庁が置かれた地区内でもあった。

## 2 城崎

昔は「木佐岐」といって佐嘉郡六郷の一つ城崎郷であった。ここに国分忠俊（法名尊光）が尊光城（館）を構てえた。今の城徳寺はその跡だという。寺の境内に弓塚という小丘があり、これが昔の場だったともいわれているが判明しない。忠俊は又春日に尊光寺を建てている。今は廃寺となっているが塚原司氏宅がその跡といわれ、今もなおこの地名を尊光寺と呼んでいる。前隈山の麓である。

## 3 鍵尼

鑰山とも言い、鑰尼信濃守国分季高の居城跡といわれている。

## 4、春日・東山田・西山田

今からおよそ千四百年前、皇后に皇子が生まれなるときは、皇后の名を残すため「女代田」という御料地において、その収穫物を納める屯倉（朝廷直轄の倉庫等）を設ける習わしがあった。安閑天皇の皇后春日山田皇女に皇子がなかったので御料地を春日村に置いた。その皇女の名をとって春日、山田の地名が起こったという説がある。又一説にはこの屯倉は熊本県託間郡三宅にあったともいうが、今のところ春日村内に「屯倉」の跡とされるものは見つからない。

高城寺の後ろの山は昔甘（神）奈備山といったのが、後世春日山というようになった。それは春日明

神垂跡の靈地から来た名で、高城寺の山号を春日山というのもそれによると高城寺記に書かれている。

甘奈備城主高木氏は藤原氏の末孫で、藤原氏の祖神は春日明神（たけみかづちの神、いわひぬしの神あめのこやねのみこと、ひめ神）であるから、この山頂に、あめのこやねのみことを祭神として甘南比社が建てられた。春日の地名も恐らく春日明神の春日をとったのではなからうか。

「山田」の地名は、和名抄に「佐嘉郡山田郷」とあり、鎌倉期に鑄造した健福寺の銅鐘にも「佐嘉郡山田西郷」と書かれている。肥前風土記には「佐嘉郡の西に佐嘉川があり……土蜘蛛大山田女、狭山田女の二女……」とあり、山田に住んでいた姉妹のことで奈良時代以前に山田の地名があったようである。

## 5 川上

肥前風土記に「山の川上に荒神あり、往来の人、なかば生きなかば殺さる……」とあり、川の上流ということであろう。明治二十二年市町村実施のとき、川上村を名護屋村とする説もあつたらしい。

## 6 惣座

ここは国司が肥前国内の主な神社への巡拝の労を省くため諸神を集め祭った所である。観応二年（一三五二）六月十五日付肥前旧事に「肥前国佐嘉郡總座」とあり、応永七年（一四〇〇）河上社古文書の中に「惣社」という神社名があり、又河上八社の中に「僧座社」の名も見える。現地名の惣座は「總座」「惣社」「僧座社」等から転じて起こったものと思われる。

## 7 上戸田・下戸田

上戸田天満宮の鳥居に「富田村」とある。この鳥居は文政四年（一八二一）の建立である。富田と書いて「トダ」と読んでいたであろう。上、下に分かれたのはいつからかわからない。

## 8 都渡城

都渡城は昔「都人來」と書いたといわれるが、都人來と記した書き物はまだ見当たらない。約三百六十年前にできた葉隠聞書の中には「都渡城」の文字があり、百九十年前の天明五年の絵図にも都渡城と書いてある。久米邦武氏は「佐嘉」は「坂」が多いので「さか」が「さが」となり、坂を下る車の音が轟くことから「とどろき」が「とどぎ」に転化したと言われている。又元山口大学教授川副博氏も久米説をとられているが、これは今後の研究課題であろう。

## 9 出羽

中央公民館の東方、通称丸山に羽黒権現社が祭られていた。丸山開拓のため現在は中央公民館のすぐ東側の国道側に移転されている。昔は玉林寺の抱宮で玉林寺管轄の社であった。この社は山形県出羽の羽黒山、羽黒権現を勧請した社である。（玉林寺開山無着禪師はこの山形県の出羽羽黒山で修行していた）羽黒山は出羽三山の一つで修験の山として繁栄した霊山である。山頂付近に出羽神社がある。出羽部落の地名はこれによって起こったものと言われている。

## 10、於保

今から約七百年前の建長七年（一二五五）、於保三郎宗益という豪族が当町於保に住み、於保並びに鍋島町増田を領し、肥前執行職として権力を持っていた。その子孫は代々於保姓を名乗っている。この姓がそのまま地名となった。於保村を安松村と言っていた時代もある。元龜元年（一五七〇）今山陣の時に於保家は亡び、龍造寺隆信によってこの城跡に於保天満宮を移し建てられ今日に至っている。

## 11、屋形所

後鳥羽上皇が当地御通過の折りこの部落へ仮泊された御館のあった所ということから屋形所といふとか。「鳥羽院山教信寺由来記」によると、後鳥羽上皇が隠岐に流されるとき、菟田郷の領主西川家房が自分の領地である神埼郡絹巻里に上皇を移し、上皇はその地で延応元年（一二三九）に崩御されたという。それでこの地を鳥羽院と称した。後世では鳥羽院と書いて「とばえ」といつている。

## 12 折敷野

御鳥羽上皇御通過の節、ここで休憩され、道端のしばを折り敷物にされたので折敷野というようになったという伝説がある。

## 13 大願寺

昔北條時頼が当地へ来て病気が治ったとき、五社に平癒祈願し病気が治ったので大願成就寺と名付けた。それが後に大願寺になったという伝説もあるが、ここには奈良時代、国分寺にも匹敵する大伽藍が建てられ万年山大願寺と称していたので、大願寺という名はこの寺名によると見るのが確かだろう。

# 民 俗



往年の平野浮立

## 14 今山・横馬場

男女神社由来記によれば、ここら一円を男女山と言い、今山というのは「今」の字は「二タリノ人」と書く。「二タリ」とは男女の二神を指したものとされた。昔はここに光明寺（廃寺）があり、その塔頭（子院）や末寺が建ち並び、南北に通ずる道路堅馬場、東西に通ずる道路横馬場があった。横馬場はこの道路名がそのまま地名になったという。

## 15 山王

ここには山王社が祭られている。山の神の信仰であって、平安期の始めごろ、比叡山に「大山くい命」を祭ったのが始まりと言われている。山王という地名はこの社名からきたものであろう。

## 16 国分・尼寺

天平のころ、国ごとに国分寺が建てられた。肥前の国では大和町国分に国分僧寺、尼寺に国分尼寺が建てられたことは歴史篇で詳述したが、その寺名がこの地名となったものである。

## 17 大和町

昭和二十八年の町村合併促進法に基づいて、昭和三十年四月十六日隣接している春日、川上、松梅の三村が合併し大和村として発足した。旧三村大和の精神を基調とした住民の福祉を増進するのがねらいで命名された。昭和三十四年一月一日町制施行により大和町と改称した。